人に悪いことをしなければ、自分にもされない　　イスラエル

昔むかし、スザの都に、底抜(そこぬ)けに正直な男が住んでいました。

あるとき、男が道を歩いていると、だれかが、しゃべっているのが聞こえました。ひとりが、もういっぽうをなぐさめて、

「おまえ、だいじょうぶだよ。人に悪いことをしなけりゃ、自分にもされないよ」といっていました。男はそれを聞いて、

「いいことを聞いたぞ。人に悪いことをしなければ、自分にもされない。なるほど、あいつのいっていることは、きっと正しい」と思いました。

また歩いていくと、こんどは、何人かの人が座っていて、その中のひとりが、しきりにしゃべっていました。

「だいじょうぶだ。人に悪いことをしなければ、自分にもされないんだ」

男は、

「一日に同じことわざを二度も聞くなんて。これは天のお告げかも知れん」と思いました。

やがて、日が暮(く)れるころ、男は町はずれにやって来ました。すると、ひとりの男の人が、道に倒(たお)れていました。「はて」と思って近づいてみると、その人は死んでいました。男はびっくりしましたが、

「そうだ、人に悪いことをしなければ、ほんとうに自分にもされないものなのか、確かめてみよう」と考えました。

男が立っていると、警官(けいかん)がやって来て、

「おまえが殺(ころ)したのか」と聞きました。男が、

「はい、そうです」と答えると、警官は男をつかまえて牢屋(ろうや)に入れてしまいました。

あくる日、裁判(さいばん)が開かれました。男がいやにすらすらと、人を殺したことを認(みと)めるので、裁判官はふしぎに思いました。けれども、殺人は重い罪(つみ)です。男は、縛(しば)り首(くび)にされることになりました。

この国では、たとえ殺人犯(はん)でも、金三百デナーレをはらえば、許(ゆる)してもらえることになっていました。もしお金がなければ、三日のあいだに物乞(ものご)いをしてお金を集めてもよいという権利(けんり)がありました。うまく三百デナーレ集めることができれば許されるのです。

けれども、集められなかったら、町の広場で縛り首になります。
男がお金を持っていなかったので、裁判官は、男に箱を持たせ、警官をふたりつけて、町へ物乞いに行かせました。
町に出ると、たくさんの人が寄ってきました。男を憐れむ人もあれば、あざ笑う人もいました。夕方、牢屋にもどって箱を開けてみると、百二十デナーレ入っていました。
警官たちは、
「あと二日あるから、この分なら、助かりそうだな」といって、喜んでくれました。けれども男は、まるで他人ごとのような顔をしていました。
つぎの日は、九十五デナーレしか集まらず、最後の日は二十デナーレも集まりませんでした。警官たちは、
「道行く人たちに、しっかりお願いするんだ。さもないと、おまえ、助からないぞ」といいましたが、男は、やっぱり他人ごとのように知らん顔をしていました。
結局二百三十五デナーレしか集まらなかったので、縛り首に決まりました。それでも男が平気なので、警官たちも裁判官も、ふしぎがりました。
つぎの日、町に張り紙が出されました。
「ひとりの男が、人を殺した科で縛り首になる。明日正午、町の広場にて処刑することになった。見たいものはだれでも来てもよい」
つぎの日、男は赤い服を着せられて、広場の絞首台へ引いて行かれました。正午前になると、両手両足をしばられ、首に縄をかけられました。そのとき、とつぜん、ひとりの男が馬をとばしてやって来て、さけびました。
「おおい、待ってくれ。その人を放してくれ。人殺しはおれだ。その人ではない」
裁判官は、ぎょうてんしていいました。
「そんなばかな。本人が、自分がやったと認めているではないか」
「それは真実ではない」と、馬に乗ってきた人はいいました。
「わたしが、殺しました。そして今もうひとり、わたしのために殺されようとしています。人殺しをもうひとつ背負いこむのはまっぴらです。じつは、一度目は、ほんの事故で、わたしが悪くはなかったのです。けれども、今度は、まったくわたしのせいで殺されようとしています。だから、こうして名乗り出たのです」
裁判官は、絞首台に立っている男に、何かいうことはあるかとたずねました。男はい

いました。

「では、ほんとうのことをいいます。わたしは、『人に悪いことをしなければ、自分にもされない』ということわざを一日に二度も聞きました。そこで、それがほんとうかどうか知りたいと思ったのです。いや、おかげさまで、ほんとうであることがわかりました」

裁判官も警官たちも笑いだしました。

「とんだ奇跡を当てにしたものだな。あと一分もおそかったら、あの世行きだったぞ」

男は答えました。

「神さまのお恵みによって、このとおり、わたしは無事でした。これも、わたしが人に悪いことをしなかったからだと思います」

裁判官は、ただちに男を釈放しました。物乞いで集めたお金も男に与えました。そして、あとから名乗り出た犯人に、

「この人は、おまえのために三日間牢屋でつらい思いをしたのだから、おまえも何か出してはどうか」といいました。真犯人は、すぐに、たくさんのお金を男にわたし、犯した罪を悔い、三百デナーレ支払って許してもらいました。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話18イスラエル』小川超訳／ぎょうせい